

令和 2 年 6 月 8 日現在

機関番号：27101

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2015～2019

課題番号：15K16694

研究課題名（和文）明治期 文芸メディア 研究基盤構築のための錦絵データベースの作成

研究課題名（英文）Nishiki-e Database for study of Literary Arts and Media in the early part of the Meiji

研究代表者

生住 昌大 (Ikizumi, Masahiro)

北九州市立大学・文学部・准教授

研究者番号：40612453

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：調査と収集によって、計913点の西南戦争関連の錦絵（以下、西南戦争錦絵）を実際に確認することができ、それらを目録化することができた。また、本研究の成果を社会に広く公開するための「西南戦争錦絵データベース」（[ikizumi-lab.com](http://ikizumi-lab.com)）も開設した。現在このデータベースでは、目録に加えて、237作品を画像付きで公開している。

さらに新聞連載や講演など、多くの依頼があった。思わぬかたちで本研究の成果を直接的に社会へと還元する機会が得られ、社会からの要請にも応えることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

これまで西南戦争錦絵は、「ほぼ五百点に近いものがあると考えられる」（小西四郎「錦絵随想7」）と想像されてきただけで、本格的調査はなされていなかった。しかし本研究によって、900点を超える数の関連錦絵が刊行されていたことが明らかとなった。

これらを目録化し、掲載許可が得られた資料に関しては画像付きで広く社会に公開する「西南戦争錦絵データベース」を公開できたことで、いまだ研究が進展していないこの方面の研究基盤を構築できたのではないかと考えている。

研究成果の概要（英文）：By an investigation and collection, I had confirmed 913 works of Seinan War Nishiki-e and made in the list. Also I had set up a Web site called "Seinan War Nishiki-e Database" and widely disclosed the result of this research to society. In this database, not only the list, but also 237 works are being exhibited now.

Furthermore, I had received many requests such as newspaper serialization and a lecture. I unexpectedly had gotten a chance to give back to society, and met a request of society.

研究分野：日本近代文学

キーワード：錦絵 西南戦争 士族反乱 実録 新聞 戯作者 浮世絵師

## 1. 研究開始当初の背景

明治10年に起こった西南戦争をリアルタイムで描いた錦絵は、この戦争の雰囲気伝える視覚的資料として、小中高の学校教科書や歴史読み物等に掲載され、テレビの歴史番組等でもしばしば使われてきた。ゆえに社会的な認知度は決して低くはなかったが、それでも本研究の開始当初は、本格的な研究の俎上には載せられたことがない資料であった。

その大きな理由の一つは、西南戦争錦絵の際的的な性格にあった。これらは日々刻々と移り変わる戦況を伝えるための報道媒体の一つとして刊行されたものであったが、事件報道を建前としながらも、俗うけを狙って虚構もふんだんに盛り込んで作られた「商品」でもあった。それゆえに、「芸術性」や「芸術的価値」というものを今よりも素朴に信じていた時代の研究者たちは、西南戦争錦絵の存在にはほとんど無関心であり続けたのである。

例えば、日本近代美術史の研究領域。経済学者でありながら浮世絵収集家の顔も持ち、浮世絵研究者としても知られる高橋誠一郎は、西南戦争錦絵を「ニュース版画」と位置づけ、「私はニュース版画を好まず、又其の芸術的価値を殆ど認めざるものであつて」（『芳年の描いた西南戦争錦絵』『大磯割記』理想社、1944年）と厳しい評価をなした。これは日本近代美術史研究の領域からの、西南戦争錦絵に関する極めて数少ない言及の一つなのだが、西南戦争錦絵に対する評価を拾い集めるのが困難なほど、西南戦争錦絵は見向きもされてこなかったのである。現在、明治期の浮世絵研究を精力的に推し進めている菅原真弓が、1990年代の研究状況を振り返って、「特に明治期の浮世絵などは、およそ美術史研究の対象とはなり得ない存在でした」（『月岡芳年伝』中央公論美術出版、2018年）と述べているくらいであるから、「ニュース版画」と位置づけられた西南戦争錦絵に対する研究の進捗状況は、推して知るべしである。

百歩譲って「芸術的価値」は存しないとしても、日本の近代史を語る上で無視することのできない一大事件を描いた西南戦争錦絵については、歴史学の領域において研究の蓄積があっても良さそうなものである。しかし、塩谷七重郎『錦絵で見る西南戦争——西南戦争と福島県人』（歴史春秋社、1991年）が指摘するように、「浮世絵師、或いは版元たちは売らんがためには俗うけをねらって、嘘のことも平気で書いた」ので、歴史学者たちもまた、これらの資料には関心を向けてこなかったのである。

また、西南戦争錦絵が報道媒体の一つであったならば、メディア研究の領域ではどうかと先行研究を尋ねてみても、事態はほとんど変わらない。早くから明治開化期のメディア状況に関心を向け、小新聞や錦絵新聞に関する研究を積み上げてきた土屋礼子が、その著『大阪の錦絵新聞』（三元社、1995年）において錦絵新聞に分類できる西南戦争錦絵を紹介してはいるものの、メディア史においても本格的な研究の蓄積は見当たらない。

ちなみに、西南戦争錦絵を集めた画集ならば、本研究開始当初からすでにいくつか備わっていた。代表的なものに、小西四郎『錦絵 幕末明治の歴史⑦ 西南戦争』（講談社、1977年）や、塩谷七重郎『錦絵で見る西南戦争——西南戦争と福島県人』（前掲）がある。これらの画集のおかげで、一般の人でも西南戦争錦絵の存在を手軽に知ることができるようになった。そうした意味において、これら画集が西南戦争錦絵という資料の周知に果たした役割は極めて大きい。学術的に見ればやはり資料紹介の域に留まるものであることもまた否めない。さらに、西南戦争錦絵の刊行点数についても、小西四郎『錦絵随想 7』（『錦絵 幕末明治の歴史⑧ 西南戦争』月報）に「西郷や西南戦争をえがいた錦絵は、ほぼ五百点に近いものがあると考えられる」と想像されているだけで、日本各地にどれほど残っているのか、本格的な調査は手つかずのままとなっていた。

## 2. 研究の目的

たとえ「芸術的価値」（前掲、高橋誠一郎）が認められない資料であったにせよ、また「嘘のことも平気で書いた」（前掲、塩谷七重郎）資料だったにせよ、日本近代文学の研究領域に身を置き、幕末から明治へと移り変わっていく端境期の文学史的状况に関心を寄せる筆者にとっては、西南戦争錦絵という資料が、明治初期の戯作者の動向を明らかにする上で欠かせない資料である点で、ぜひとも検討がなされるべき資料だと考えた。なぜなら、浮世絵師だけでなく旧来の戯作者までが、西南戦争錦絵制作の現場に動員されているからである。

明治5年に仮名垣魯文と条野採菊の二人の戯作者から明治政府に提出された「著作道書き上げ」には、事実尊重という新時代の風潮に行き場をなくした戯作者たちが、生き残りをかけて従来の戯作の筆を絶ち、庶民を導く教導役へと転向する旨が宣言されている。そこには、明治5年時点で戯作者として活動できている者は、「私共兩人其他兩三名ノミ」と記されており、この時期に戯作者が置かれた窮状を垣間見ることができる。しかし、当時随一の人気を誇った仮名垣魯文でさえ、翌6年には神奈川県庁に入庁して糊口を凌ぎ、7年には新たな活躍の場を求めて『横浜毎日新聞』の記者へと転職している。この時期、これほどまでに戯作者たちが追い込まれていたことは、文学史の上ではよく知られたことである。

そして、一度は廃業に追い込まれた戯作者たちは、西南戦争を機に出版界に再び呼び戻されることになる。しかし、そのときに戯作者たちが著した西南戦争実録については、『日本近代文学大事典 第4巻』（講談社、1977年）が、「いずれも際も的的で文学的価値に乏しい」と厳しい

評価を下していた。それでもいくつかの研究が試みられ、西南戦争実録に関するまとまった研究の成果が提出されたのは2009年のことで、佐々木亨『明治戯作の研究——草双紙を中心として』（早稲田大学出版部）の上梓を待たねばならなかった。佐々木亨は一連の研究のなかで、西南戦争期にリアルタイムで刊行された実録的読み物の盛り上がり、明治11年の『鳥追阿松海上新話』に始まる明治戯作復活の呼び水となったことを指摘し、これによってようやく西南戦争実録は、近代文学史の中に位置づけられるようになったのである。

ただし文学研究の領域でも、西南戦争の錦絵については、どのような戯作者がどれほど西南戦争錦絵の制作に関わったのかまでは、明らかにできてはいなかった。また、戯作者が西南戦争錦絵という媒体の中で、どのような内容の文章を物したのかということについても、具体的にはほとんど明らかにされていなかった。

またそれ以前に、そもそも西南戦争錦絵の刊行点数が想像でしか語り得ない状況が目の前にあった。こうした状況の中では、上記の事柄についても想像で語るしか術はなく、これでは研究の進展は到底望めない。西南戦争期における戯作者の動向を明らかにするために、まずは西南戦争錦絵の本格的調査が必要だと考え、本研究に着手するに至った。

### 3. 研究の方法

前述のとおり本研究の開始当初は、西南戦争錦絵についての本格的研究はまだ着手されておらず、それどころか研究対象となる資料の整備さえもなされていなかった。これらの資料から西南戦争期の戯作者の動向を探るためには、まずは現存する西南戦争錦絵を調査・収集によって可能な限り明らかにし、これら資料の全体像の把握に努めることが必要であると考えた。

したがって、研究方法としてはいたってシンプルだが、西南戦争錦絵の調査・収集という方法が必要だと判断した。その上で、西南戦争錦絵目録の作成と画像付きデータベース公開を行うことを、本研究の着地点と定めた。

ただし、資料の調査・収集と、目録の作成・画像付きデータベースの公開に際しては、以下の点を意識しながら注意深く進めていくことを心がけた。

西南戦争錦絵における従来の評価を眺めていると、そこには共時的な視点が欠けていることに気づかされる。たとえば、明治期の浮世絵はその全盛期である江戸時代のそれと比較され、浮世絵衰退期の産物として低い評価を与えられてきたように映る。また同時に、写実性を重視した近代的な西洋画と比較され、旧態依然とした作品としてさらに低い評価を与えられてきたように映る。そして「ニュース版画」とも称された西南戦争錦絵は、これら明治浮世絵の末席に据えられてきたわけである。だが、これらの評価の仕方はいずれも通時的視点に基づくものと言えよう。

だが、共時的な視点から西南戦争錦絵を捉え直せば、評価は大きく変わってくるのではないか。

明治10年に起こった西南戦争についての報道は、当然のことながら新聞メディアを中心になされた。しかし明治10年当時の新聞は、報道写真はおろか挿絵さえも備えておらず、視覚的状況というものを決定的に欠いていたことに注意を向けられたい。唯一、『東京絵入新聞』だけが挿絵を備えていたが、しかしそれは本当に小さな、簡易的な挿絵でしかなく、人々の視覚的欲求を満たすことができるような代物ではなかった。そうした新聞というメディアが決定的に欠いていた資格情報を、人々が満足できるレベルで補っていたのが西南戦争錦絵であったと、まずは評価できるようになる。

また、現在の新聞というメディアに慣れ親しんだ私たちからすれば到底考えられないことであるが、当時の新聞は「一部ノ正史ヲ作ル」ように記事を書くことを求められながらも、同時に「亦一部ノ稗官小説ヲ作ルト見倣スベシ」ともされた。なぜなら、「然ラザレバ方正板実ニ過ギテ里巷ノ耳目ニ適シ難シ」と考えられていたからであり、これは「新聞紙条例」（明治4年）というかたちで出された政府からの指針であった。

だとするならば、現在の我々からすれば過ぎた脚色と映る西南戦争錦絵に描かれた「嘘のこと」（前掲、塩谷七重郎）も、当時の未熟な新聞読者を飽きさせないための「正当な」配慮だったのかもしれない。現代の価値観をもってただちにこれらを資料的価値のないものとして退けることは控えなければならない。

たとえ過剰な脚色だったにせよ、当時の人々は視覚的にはこの錦絵をとおして西南戦争を把握するほかなかったのだから、現代の我々にとっての「史実」とは異なる西南戦争像を、当時の人々は持っていたのではなかったか。つまり、錦絵が創り出した〈もう一つの西南戦争〉というものがあったはずなのである。明治期における戯作者たちの動向を明らかにするだけでなく、浮世絵師や戯作者たちが創りだした〈もう一つの西南戦争〉を錦絵を通して再構築して検証してみることが、常日頃フィクションと向き合っている文学研究者が積極的に引き受けるべき領分であろう。

通時的視点から共時的視点へと移行することで、西南戦争錦絵の新たな資料的価値というものがこのように新たに見いだされるのではないか。

ゆえに、調査・収集、目録の作成・画像付きデータベースの公開に際しては、この共時的な視点をもって、戯作者だけでなく、浮世絵師や版元のつながりや、錦絵と新聞記事との関連性も掴みもらさぬように目配りをしながら進めていくこととした。

#### 4. 研究成果

海の見える杜美術館、鹿児島県立美術館、鹿児島市立美術館、鹿児島大学、北九州市立大学、熊本博物館、久留米大学御井図書館（以上、50音順。本研究開始前に調査を終えていた機関も含む）の協力を得て所蔵調査を行った。また、国立国会図書館、玉名市立歴史博物館の目録も参照し、さらに個人で収集した錦絵を加え、計913点の錦絵を目録化して、新たに開設した「西南戦争錦絵データベース」上に掲載することができた。

従来、「西郷や西南戦争をえがいた錦絵は、ほぼ五百点に近いものがあると考えられる」（前掲、小西四郎）と想像されてきたが、実際に調査・収集を行ったところ、その倍に近い千点に迫る数の西南戦争錦絵を確認することができた。

そして、それらの内、掲載許可が下りた錦絵237点については、「西南戦争錦絵データベース」上で、画像付きで公開している。その数は、「国立国会図書館デジタルコレクション」で「西南戦争錦絵【全冊まとめ】」として公開されている120点を優に上回る。本研究の研究成果を広く社会に還元するために開設した「西南戦争錦絵データベース」に関心を示してくださっている所蔵機関もいくつかあり、現在追加掲載に向けて交渉中で、これが叶えば500点を超える画像付きデータベースが実現する。

また、研究計画当初にはまったく想像もしていなかった、研究成果の社会還元の機会にも恵まれたことをここに特記しておきたい。2018年は、明治150年の節目の年にあたり、NHK大河ドラマ『西郷どん』人気も相まって、その前後には本研究を進めてきた私のもとにも、さまざまな依頼が届いた。具体的には、以下のとおりである。

##### (1) 新聞連載

- ① 西日本新聞「錦絵が映す西南戦争」（2017.01.09～／全5回）

##### (2) 企画展

- ① 福岡共同公文書館「西南戦争一かけめぐる情報」（2018.7～／助言、資料提供）
- ② 鹿児島県立図書館「西南戦争錦絵—寄贈資料で蘇る西南戦争」（2019.8～／助言、資料解説）

##### (3) 講演

- ① 「報じられた西南戦争—新聞・実録・錦絵」（2018.02.28／福岡共同公文書館）
- ② 「錦絵のなかの「西郷どん」」（2018.10.27／北九州市立文学館）
- ③ 「庶民が見た西南戦争—新聞報道の広がり、明治10年の出版界」（2018.12.08／鹿児島国際大学）
- ④ 「西南戦争錦絵—はじめて鑑賞する人のために」（2019.01.13／鹿児島市立美術館）
- ⑤ 「メディアが語った西南戦争」（2019.02.02／鹿児島大学国語教育学会）

##### (4) 解説

- ① 「錦絵に描かれた西郷隆盛」（企画展図録『描かれた西郷どん展—アート、文学、サブカルから』日本放送協会、2018年）
- ② 「『西南戦争浮世絵』を鑑賞する前に」（『資料集 西南戦争浮世絵』海の見える杜美術館、2018年）
- ③ 「鹿児島市立美術館が蔵する、稀少な西南戦争錦絵の二例」（『グリーンルーフ』85号、鹿児島市立美術館、2019年）

##### (5) メディア取材

- ① 毎日新聞「学びシティ！北九州 北九大・生住准教授、西南戦争の錦絵研究」（2018.11.16）
- ② RKB毎日放送「発掘ゼミ!!」（2019.11.16、0A）

これらはいずれも、本研究の活動がきっかけとなった仕事ばかりである。調査を受け入れてくださった機関、筆者の調査や研究を耳にした機関、そして論文を読んでくださった機関から、これらの依頼を受けた。さらに、西南戦争錦絵に関する一般向けの書籍を刊行する機会も得られた。タイトルは未定ながら、2020年秋頃の刊行を目指し、現在校正中である。本研究の成果が、最も好ましいかたちで社会に還元されたことをここに強調しておきたい。

最後に、今後の展望について付言する。もとより西南戦争錦絵は、文学史の空白域を埋めるだけでなく、これまでこれらの資料を等閑視してきた、美術史やメディア史の空白域を埋める資料ともなり得る。従来の固定化された研究領域の枠組みを越えて、共同的〈文芸メディア〉研究の基盤がようやく整った。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 生住昌大	4. 巻 なし
2. 論文標題 「西南戦争浮世絵」を鑑賞する前に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 資料集 西南戦争浮世絵	6. 最初と最後の頁 11-15
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 生住昌大	4. 巻 86号
2. 論文標題 西南戦争揃物錦絵集成稿 「有のそのまま」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 北九州市立大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 生住昌大	4. 巻 87号
2. 論文標題 西南戦争揃物錦絵集成稿 「方今有名録」、「鹿児島県人名録」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 北九州市立大学文学部紀要	6. 最初と最後の頁 41-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 生住昌大	4. 巻 16(4)
2. 論文標題 西南戦争実録の享受と検閲	5. 発行年 2015年
3. 雑誌名 文学（岩波書店）	6. 最初と最後の頁 192-209
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 生住昌大
2. 発表標題 報じられた西南戦争 新聞・実録・錦絵
3. 学会等名 福岡市共同公文書館講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生住昌大
2. 発表標題 錦絵に描かれた「西郷どん」
3. 学会等名 北九州市立文学館講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生住昌大
2. 発表標題 庶民が見た西南戦争 報道の広がり、明治10年の出版界
3. 学会等名 鹿児島国際大学国際文化学部主催明治維新150周年記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 生住昌大
2. 発表標題 西南戦争錦絵 はじめて鑑賞する人のために
3. 学会等名 鹿児島市立美術館講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生住昌大
2. 発表標題 メディアが語った西南戦争
3. 学会等名 鹿児島大学国語教育学会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 生住昌大
2. 発表標題 何を教え、どう伝えるのか 高等教育機関における文学研究者の課題
3. 学会等名 九州大学日本語文学会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

西南戦争錦絵データベース <a href="https://ikizumi-lab.com/">https://ikizumi-lab.com/</a>
---

6. 研究組織		
氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考